『英吉利単語篇』系統単語集の影響関係

櫻　井　豪　人

1．はじめに　－本稿の目的－

慶応二（1866）年に開成所から『英吉利単語篇』『法朗西単語篇』（以下『英単』『法単』と略記）という二つの単語集が刊行された。これらはそれぞれ1490語の英語または仏語のみを記載したものであるが、それぞれ各語に1番から1490番まで通し番号が付され、各番号の語は両者で共通している。その編纂方法は拙稿1998で指摘した通り、K. Baedeker の *Traveller's Manual of Conversation in Four Languages* というドイツ刊の英・独・仏・蘭対訳単語集を主な底本にしたものであった。翌慶応三年にその訳語集である『英仏単語篇注解』（以下『注解』）が刊行されると、これらを利用して編纂された同類の単語集が相次いで刊行された。

本稿の目的は、それらの単語集がそれぞれいずれの単語集に拠って編纂されたのかという系統関係を、実証的に明らかにすることにある。これらの単語集に記されている西洋語やその訳語はいずれもほぼ同様のものであって、参照関係を明らかにすることは容易ではないが、処々に存在する異同からある程度は系統関係を推定することが可能である。また、実証の過程でそれぞれの資料の編纂態度が窺える箇所もあるので、それについても指摘して行く。

2．本稿で対象とする資料

『英単』系統の単語集には様々な種類があるが、本稿で対象とするのは『英単』及び『法単』所収の1490語を掲出順に掲載し、かつ日本語を備えている単語集に限る。すなわち、収録語を独自に増補・削除したり、掲出順を日本語のイロハ引

きにするなどの改変を加えている単語集は対象外とする。その理由は、日本語部分の参照関係に重点を置くためで、改変の加えられた単語集は、ここで扱う資料の系統関係を把握した後に改めて別に研究されるべきものと考えるからである。

上の条件に該当する明治四年までの資料[注1]は、以下の八本となる。

開成所校本[注2]『英仏単語篇注解』（慶応三、1867年5月刊）…日本語のみ

市川清流[注3]『対訳名物図編』（慶応三、1867年9月序刊）…英語・日本語対訳

桂川甫策『英仏単語便覧』（慶応四、1868年刊）…英語・仏語・日本語対訳

戸沢光徳『通俗仏蘭西単語篇』[注4]（明治四、1871年6月刊）…仏語・日本語対訳

梅浦元善『通俗英吉利単語篇』（明治四、1871年9月刊）…英語・日本語対訳

松岡畏『英単語篇増訳』（明治四、1871年刊）[注5]…英語・日本語対訳

中村順一郎『独逸単語篇和解』（明治四、1871年11月刊）…独語・日本語対訳

『独逸訳附単語篇』（明治四、1871年刊）[注6]…独語・日本語対訳

この八本を年代で分ければ、最初の三本は幕末の著作、後の五本は明治四年の著作ということになる。よって、全ての資料の系統を考えるに当たり、まず幕末期の三本の影響関係から考えなければならない。

3．幕末期の三本の関係

既に渡辺実1962で指摘されているように、『注解』と『英仏単語便覧』（以下『便覧』）との間に訳語の相違はほとんどない。仮名遣いなどのごく微細な異同を除けば、全体の約５％程に若干の相違が見られる程度である。これに対して、その二者と『対訳名物図編』（以下『対訳』）との間には、訳語の相違が多く見られる。加えて『対訳』には、訳語のみならず『英単』の英語表記とも相違する箇所がある。以下にその実例を見ていく。

3.1. 『英仏単語篇注解』と『英仏単語便覧』の訳語の相違点

『注解』と『便覧』の相違について、仮名遣いや「下劑（ゲザイ）」と「下劑（クダングスリ）」のような微細な違いを除き、比較的意味のありそうな相異を**表１**に選び出す。また、注釈の有無で異なる箇所を**表２**に示す。（引用に際して片仮名発音表記は省略する。

以下同じ。）

表 1 や **表 2** の箇所以外は、『注解』と『便覧』で異なる部分がほとんど無いのであるから、刊年から考えれば『便覧』が『注解』を参照して編纂され、異同のある箇所は独自に改訳したものということになろう。しかし、『注解』が開成所校本であり、『便覧』が同じ開成所教授方の桂川甫策の著になることを考えれば、『便覧』が『注解』のみを参照していたとする見方の他に、開成所内部で教えられていた講義レベルでの「訳語集」があって、それぞれがその写本の「訳

表 1 :『注解』と『便覧』の訳語の相違

番号	『英仏単語篇注解』	『英仏単語便覧』
2	腰掛（コシカケ）	1オ　橇（コシカケ）
12	書翰（テガミ）	1オ　手簡（テガミ）
16	書付（カキツケ）	1ウ　文牒（カキモノ）
18	手本（テホン）	1ウ　法帖（テホン）
200	作事兵（サクジ）（作支方ナリ）	8オ　土工兵（ドコウヘイ）
203	番兵（バンヘイ）	8オ　張番（ハリバン）
227	砦壁（サイヘキ）	9オ　砦ノ外構（トリデノソトガマヒ）
229	胸壁（キヨウヘキ）	9オ　胸壁（カクレアツチ）
287	處女（ショジヨ）	11オ　處女（ムスメ）
291	幼稚（ヨウチ）	11オ　幼稚（オサナゴ）
292	少年（セウネン）	11ウ　少年（ワカキヒト）
294	出生（シユツシヤウ）	11ウ　出産（ウマレ）
556	リウマチス（病名）	21オ　龍麻知斯（リウマチス）（病名）
561	癲病（ウイビヤウ）	21オ　癲病（ライビヤウ）又、天刑病（テンケイビヤウ）
638	臥房（子マ）	23ウ　寝室（子マ）
641	圊（セツイン）	24オ　厠（カワヤセツイン）
945	虫（ムシ）但シ柔ナル虫ノ總名ナリ甲アリ羽アル虫ハウヲルムニアラズ	35オ 虫（ムシ）但シ柔虫ノ總名甲アルノ類ハインセクトト云フ
1392	有司（ヤクニン）	51オ 有士（ヤクニン）

表 2 : 注釈の有無の相違

番号	『英仏単語篇注解』	『英仏単語便覧』
6	墨汁（スミ）	1オ　墨（スミ）（彼ノ国ノ墨ハ汁ナリ）
219	施條砲（シゼウハウ）（筋ノ入タル砲）	8ウ　施條砲（シゼウハウ）
288	少男（ワカモノ）	11オ 少男（ワカモノ）（未ダ婚礼セザル若男）
289	少女（ムスメ）	11オ 少女（ワカムスメ）（未ダ婚礼セザル若女）
293	年齢（トシ）（仏　老年）仏原本 Veillesse 誤レリ Vieilesse ニ改ムヘシ	11ウ 年齢（ヨワイ）（仏　老年）
354	筋（キン）（赤肉ノ根ナリスヂニハアラス）英原本 Sinews ハ Nerves ト同義ナリ宜ク Tendons ニ改ムヘシ	13ウ 筋（キン）（赤肉ノ根ナリスヂニハアラス）
407	膝蓋（ヒザサラ）	15ウ 膝蓋（ヒザサラ）（俗ニ云ヒザッコ）
420	腎臓（ジンノザウ）（英原本 Loins ハ腰ト同語ナリ Kidneys ニ改ムルヲ是トス）	16オ 腎臓（ジンノザウ）
423	膀胱（バウクワウ）	16オ 膀胱（バウクワウ）（小便ブクロ）
467	触覚（カラダノヲボエ）	17ウ 触覚（カラダノオボエ）（寒熱痛痒等ヲ知ル感能ナリ）
633	層（カイ）（二階三階ナドノ）	23ウ 階（カイ）
650	櫃（ヒツ）仏原本 Caise ハ正カラズ Caisse ニ改ムベシ	24オ 櫃（ヒツ）
1013	小楊枝（コヤウジ）仏原本 Uncure dent ハ末ニ s ノ字ヲ添テ Uncure dents ニ改ムヘシ	37ウ 小楊枝（コヤウジ）
1357	𣗳柴（モチシバ）仏原名 gluau ハ giuaux ニ作ルヲ正トス	50オ 𣗳柴（モチシバ）

語集」を参照したことの反映とする見方も可能であろう。その場合、『注解』と『便覧』の関係は、「親子関係」ではなく「兄弟関係」ということになる。

なお『便覧』には360語目の「the features / les traits 相（ザウ）（顔ノ）」の後に『英単』及び『法単』にない「forehead / le front 額（ヒタイ）」（14オ）という語があり、そのため1491語となっている。

3.2. 『対訳名物図編』

『対訳名物図編』（以下『対訳』）は、「附言」に慶応三年九月の日付が記されているので、『注解』が刊行された慶応三（1867）年五月の数か月後に刊行されたものと考えられる。すなわち、慶応四年刊の『便覧』よりも早く成立しているので、『対訳』が参照した可能性の考えられるのは『注解』のみということになる。（また、刊行年代からは『便覧』が『対訳』を参照することも可能ではあるが、内容からはそのような参照関係を見出すことができない。）

前述の通り、『対訳』は『注解』や『便覧』とは異なる訳語を多く有する。その相違の程度は、甚だしいものから微細なものまで様々であるが、全体の約半数程度の語について何らかの相違がある。紙幅の都合上、とてもその全てを書き尽くせないので、Part Ⅰの30語についてのみ**表3**に掲げ、その例とする。

このような相違が存在する原因は、『対訳』が『注解』と全く無関係に編纂されたからというわけではなさそうである。むしろ『注解』を参照しつつ、独自に変更を加えているようである。それは例えば以下の点から窺える。

3.2.1. 『対訳名物図編』における英語表記の変更

『対訳』は他の『英単』系統単語集に比べて独特な訳語を多く持つのが特徴であるが、英語表記においても『英単』と異なる箇所がいくつかある（**表4**）。他の単語集において、このような英語表記の異同は全く認められない。

拙稿1998で指摘した通り、『英単』の全1490語のうちPart Ⅰの30語はVan der Pijlの蘭英対訳単語集*Gemeenzame Leerwijs*に拠っており、残りの1460語はK. Baedekerの*Traveller's Manual*に拠っている。これら原本の英語表記と『英単』及び『対訳』の英語表記とを対照させてみると、全て『英単』の方の英語表記と一致するので、『対訳』の英語表記が後に独自に変更されたものであることがわ

表３：『対訳名物図編』と『注解』『便覧』との訳語の相違（Part Ⅰの30語）

番号	『英吉利単語篇』	『英仏単語篇注解』	『対訳名物図編』	『英仏単語便覧』
1	The table.	ツクヘ 机	ツクエ 机 table.	ツクヘ 机
2	〃 (The) bench.	コシカケ 腰掛	コシカケ 牀几 bench.	コシカケ 榿
3	〃 (The) pen.	フデ 筆（毛筆ニハアラズ）	フテ 筆 pen.	フデ 筆（毛筆ニハアラズ）
4	〃 (The) penknife.	フデキリコガタナ 筆切小刀	フデキリコガタナ 修 筆 刀 penknife.	フデキリコガタナ 筆切小刀
5	Paper.	カミ 紙	カミ 紙 Paper.	カミ 紙
6	Ink.	スミ 墨汁	スミ 墨汁 Ink.	スミ 墨汁（彼ノ国ノ墨ハ汁ナリ）
7	An inkstand.	スミツボ 墨汁壷	スミイレ 墨斗 inkstand.	スミツボ 墨壷
8	A slate.	セキバン 石盤	セキバン 石盤 slate.	セキバン 石盤
9	The slatepencil.	セキバンフデ 石盤筆	セキバンフデ 石盤用筆 slatepencil.	セキバンフデ 石盤筆
10	〃 (The) ruler.	ヂヤウギ 定規	ヂウキ 界尺 ruler.	ヂヤウギ 定規
11	〃 (The) leadpencil.	セキヒツ 石筆	セキヒツ 石筆 leadpencil.	セキヒツ 石筆
12	A letter.	テガミ 書翰	モンジ テガミ 文字又手簡 letter.	テガミ 手簡
13	〃 (A) line.	ギヤウ ヒトクダリ 一行	ヒトクダリ 一 行 line.	ヒトクダリ 一 行
14	〃 (A) book.	ホン 書籍	ホン 書籍 book.	ホン 書冊
15	〃 (A) writing-book.	シラチヤウ 草 本	サツシ 册子 copy-book.	シラチヤウ 草 本
16	〃 (A) writing.	カキツケ 書付	チヨジユツ カキモノ 著 述 又書物 writing.	カキモノ 文牒
17	〃 (A) page.	マイ 半枚	カミノカタメン 片 面 紙 page.	ハンマイ 半枚
18	A copy.	テホン 手本	ウツシ 寫書 copy.	テホン 法帖
19	〃 (A) leaf.	マイ 一枚	イチマイ 一枚 leaf.	イチマイ 一枚
20	〃 (A) pencase.	フデイレ 筆筒	フデイレ 筆挿 penholder.	フデイレ 筆筒
21	Sand.	スナ 砂	フリスナ 砂 Sand.	スナ 砂
22	The sandbox.	スナイレ 砂筥	スナイレ 砂函 sandbox.	スナイレ 砂筥
23	A foldingstick.	ヘラ 篦（紙ニ折目ヲ附ケ又ハ切ル為ノ）	カミキリヘラ 裁紙篦 foldingstick.	ヘラ 篦（紙ニ折目ヲツケ又ハ切ルタメノ）
24	An exercise.	ブンシヤウ 文 章	ブンノナラヒガキ 習 文 稿 exercise.	ブンシヤウ 文 章
25	Sealingwax.	フウジラフ 封 蠟	フウジロウ 火 漆 Sealingwax.	フウジラウ 封 蠟
26	Wafers.	フウノリ 封糊	フウジノリ 封 粘 Wafers.	フウノリ 封糊
27	The master.	センセイ 先生	シシヤウ 師匠 master.	センセイ 先生
28	〃 (A) preceptor.	シシヤウ 師匠	センセイ 先生 preceptor.	シシヤウ 師匠
29	〃 (A) scholar.	ガクセイ 學生	ジユクセイ 塾 生 scholar.	ガクセイ 學生
30	A pupil.	デシ 弟子	デシ 弟子 pupil.	デシ 弟子

表4：『対訳名物図編』における英語表記の変更箇所（すべて）

番号	『英吉利単語篇』	『英仏単語篇注解』	『対訳名物図編』	『英仏単語便覧』
15	〃 (A) writing-book.	草本（シラチヤウ）	1ウ 册子（サフシ） copy-book.	1ウ 草本（シラチヤウ）
20	〃 (A) pencase.	筆筒（フデイレ）	2オ 筆挿（フデイレ） penholder.	1ウ 筆筒（フデイレ）
162	Larboard.	取舵（トリカヂ）（舷ノ左側）	9オ 左舷（トリカヂ） port.	6ウ 取舵（トリカヂ）（舷ノ左側）
188	〃 (The) soldier.	兵卒（ヘイソツ）	10ウ 卒（ナンガル） Priwate（ママ）	7ウ 兵卒（ヘイソツ）
213	〃 (The) cartridge-box.	薬包盒（ハヤゴイレ）	11ウ 銃包函（パトロンイレ） cartridge-Poach.	8ウ 薬包盒（ハヤゴイレ）
223	〃 (The) bombs.	爆丸（ボンベン）	12オ 空丸（ウレダマ） shell.	9オ 爆丸（ボンベン）
354	〃 (The) sinews.	筋（キン）（赤肉ノ根ナリスヂニハアラズ）英原本Sinewsハ Nervesト同義ナリ宜ク Tendonsニ改ムヘシ	19オ 腱（スヂノ〻） Tendons.	13ウ 筋（キン）（赤肉ノ根ナリスヂニハアラズ）
365	〃 (The) apple of the eye.	眼球（メダマ）	19ウ 眼玉（メノタマ） ball of the eye.	14オ 眼球（メダマ）
377	〃 (The) grinders.	齲歯（オクバ）	20オ 齲（オクバ） doubletooth.	14ウ 齲歯（オクバ）
604	〃 (The) watchhouse.	番所（バンショ）	31ウ 番所（バンショ） police-station.	22ウ 番所（バンショ）
608	〃 (A) crossway.	十字街（ヨツツヂ）	31ウ 十字街（ヨツツヂ） crossstreet.	22ウ 十字街（ヨツツヂ）
637	The saloon.	客座敷（キヤクザンキ）	33オ 客殿（キヤクマ） drawingroom.	23ウ 客座敷（キヤクザンキ）

かる。ただし、変更と言っても、指しているもの自体は変更前と何も変わっていない。恐らく著者が自分の判断で、より適切であると考えた語に変更したものであろう。

ただし、354番の変更は他の箇所と少々違う意味合いを持つ。この変更は、『注解』の注釈の内容と同じものであり、ここから『対訳』が『注解』を参照していたことが窺える。

また、『注解』には『英単』の英語を変更するよう指示している注釈がもう一箇所ある。すなわち、420番の「腎臓（ジンノザウ）　英原本Loinsハ腰ト同語ナリ　Kidneysニ改ムルヲ是トス」であるが、『対訳』の当該箇所の英語は“loins.”のままになっている（22オ）。しかしこれは単に訂正し落としただけのようで、片仮名発音注だけが訂正されて「loins. キドニーズ」と記されている。

このような箇所から『対訳』が『注解』を参照していたことが窺え、編纂方法や翻訳態度を考える上で参考になる。すなわち、『対訳』における『英単』や『注解』との相違は、何らかの意図をもって変更されたものと考えるべきであろう。[注7]

3.2.2.　『対訳名物図編』における訳語の変更例

表3からもわかるように、『対訳』と『注解』の訳語の相違には、例えば「砂函（スナイレ）」と「砂筥（スナイレ）」のようにそれ程重要でない相違もあるが、重要な意味を持つ変更箇所もいくつか存在する。

例えば、『注解』では日本語に訳しにくい語、あるいは相当する物が日本にない語は片仮名で外来語として記す傾向があるが、『対訳』はそのような語もできる限り日本語に翻訳しようとしている（後掲の**表11・12**参照）。これは、『注解』とは一線を画す、強いこだわりの現れであろう。

その他にも『対訳』には、『注解』の記述を鵜呑みにせず積極的に改良を加えようとする姿勢が見られる。**表5**にその一例を掲げる。

表5で問題なのは、550～552番と556番の訳語である。550番“The flux.”の訳語は、『注解』や『便覧』では「傷冷毒（シヤウレイドク）」であるが、『対訳』では「痢病（リベウ）」となっており、「傷冷毒（シヤウレイドク）」は556番の“Rheumatism.”と対応している。さらに、『注解』や『便覧』において「痢病（リベウ）」は552番の“Dysentery.”と対応しているなど、この箇所の英語とその訳語の対応関係は、『対訳』と『注解』『便覧』とでかなり異なっている。

一般に英語のdiarrhoeaは「下痢」をさし、dysenteryは「赤痢」をさすので、551番と552番の対応関係については『対訳』の方が妥当のように思われる。ただし、『注解』や『便覧』の訳語も誤りではない。では550番はどうかというと、こ

表5：『対訳名物図編』における訳語の変更例

番号	『英吉利単語篇』	『英仏単語篇注解』	『対訳名物図編』	『英仏単語便覧』
549	Inflammation.	炎症（エンシヤウ）（焮衝）	28ウ 焮衝（キンシヨウ） Inflammation.	20ウ 焮衝（キンシヨウ）
550	The flux.	傷冷毒（シヤウレイドク）	28ウ 痢病（リベウ） flux.	20ウ 傷冷毒（シヤウレイドク）
551	Diarrhoea.	泄瀉（ハラクダリ）	28ウ 下痢（ハラクダリ） Diarrhoea.	20ウ 泄瀉（ハラクダリ）
552	Dysentery.	痢病（リビヤウ）	28ウ 赤痢（アカハラクダリ） Dysentery.	20ウ 痢病（リビヤウ）
553	The dropsy.	水腫（ハレモノ）	29オ 水腫（スイキ） dropsy.	20ウ 水腫（ハレモノ）
554	Consumption.	癆瘵（ラウシヤウ）	29オ 癆瘵（ラウサイ） Consumption.	20ウ 癆症（ラウシヤウ）
555	Epilepsy.	癲癇（テンカン）	29オ 癲癇（テンカン） Epilepsy.	20ウ 癲癇（テンカン）
556	Rheumatism.	リウマチス（病名）	29オ 傷冷毒（シヤウレイドク） Rheumatism.	21オ 龍麻知斯（リウマチス）（病名）

れはそもそも550番で要求されている意味が何なのかという問題になってくる。確かに英語の flux には「下痢」の意味もあるので、その意味で『対訳』の「痢病」は間違いではない。しかし、『法単』においてこの550番は "La fluxion." となっており、この仏語は「下痢」の意味にはなりえず[注8]、「炎症・充血」の意味となる。すなわち、これは『英単』『法単』の原本である *Traveller's Manual* において、550番の語が「下痢」の意味を示しているのか「炎症・充血」の意味を示しているのか、という問題に遡る。よって、**表 6** に *Traveller's Manual*[注9] の該当箇所（p. 46〜p. 49）を、掲出順に並べてみる。

Traveller's Manual には、549番 "Inflammation."（炎症）と550番 "The flux." との間に "Inflammation of the lungs."（肺炎）と "Brain fever."（脳炎）の二語が入っている。仏語の "La fluxion." や伊語の "La flussione." は「炎症・充血」を指す語であるし、それまでの語の繋がりから考えれば、550番は「炎症・充血」の意味と思われる。しかし、以下に "Diarrhoea."（下痢）や "Dysentery."（赤痢）の意味の語がくることを考えると、550番は「下痢」の意味と取れなくもない。

ここでの意味の不明確さは、実は *Traveller's Manual* が "The flux. / Der Fluss." と "La fluxion. / La flussione." とを対応させてしまっていることに原因がある。もし仏・伊語の "La fluxion. / La flussione." に基準を置くなら、英・独語も "The fluxion. / Die Fluxion." とすべきであり（その場合は「炎症・

表 6 ：*Traveller's Manual* における "The flux." の意味について

単語篇番号	K. Baedeker: *Traveller's Manual of Conversation in Four Languages* (18th ed. 1866)			
	英語表記	独語表記	仏語表記	伊語表記
549	Inflammation.	Die Entzündung.	L'inflammation.	L'infiammazione.
	Inflammation of the lungs.	Die Lungenentzündung.	La pleurésie.	La pleurisia.
	Brain fever.	Die Gehirnentzündung.	La fièvre cérébrale.	La febbre cerebrale.
550	The flux.	Der Fluss.	La fluxion.	La flussione.
551	Diarrhoea.	Der Durchfall.	La diarrhée; le dévoiement.	La diarrea; la menagione. Il flusso di ventre.

充血」の意味)、逆に英・独語の“The flux. / Der Fluss.”に基準を置くなら、仏・伊語を“La flux. / Il flusso.”とすべきである。ただ“The flux. / Der Fluss. / La Flux. / Il flusso.”に統一した場合、確かに英語では「下痢」の意味を持つが、その他の言語では必ずしも「下痢」の意味とはならず、「(体液などの)異常流出」という、より漠然とした意味となる。

結局のところ、*Traveller's Manual*に遡っても550番で要求されている意味を確定することはできないが、重要なのは、『対訳』が仏語と対応を完全に切り離して、英語との対応に基づいて『注解』の訳語を改訂していることである。もとより『対訳』は仏語との対訳を想定したものではないので、『対訳』の「痢病(リベウ) flux.」の対応は間違いではない。むしろ、『注解』の「The flux. 傷冷毒(シヤウレイドク)」の対応を適切でないと捉えて改良したと見るべきであろう。

では、その「傷冷毒(シヤウレイドク)」とは何なのかという問題が次に生じる。『注解』ではこれを“The flux. / La fluxion.”に当てているが、『対訳』では556番の“Rheumatism. / Le rhumatisme.”に当てている。

『日本国語大辞典』によれば、「傷冷毒」は「風湿、リューマチのような関節不随の病気の総称。湿地帯などに多い。」とされ、用例として『西洋作家雛型』(村田文夫・山田貢一郎訳、明治三十四年)からの一例のみが挙げられている。この用例は時代的に少し遅れるので確実ではないけれども、『対訳』の「傷(シヤウ) 冷(レイ) 毒(ドク) Rheumatism.」の対応は、間違いではなさそうである。(明治六年の柴田昌吉・子安峻共編『附音挿図英和字彙』[注10]の Rheumatism の項にも「風濕、風毒(ドク)、傷(シヤウ)冷(レイ)毒」とあり、これを裏付ける。)ただ、この「傷冷毒」という言葉は、近世末期か近代初期頃の比較的新しい言葉のようで、『大漢和辞典』にも立項されていない。いくつかの同時代辞書を参照したが、『注解』以前の掲出例を見出せなかった。

逆に『注解』の“The flux. / La fluxion.”と「傷冷毒」との対応はどうかというと、実はこれもあながち間違いとは言えない。例えば春風社『和訳独逸辞典』(明治五年刊)の Fluss の項に「大川、瘻痲盾斯、滿潮」とあり、独語の Fluss にリューマチの意味を認めている。また、時代は古くなるが、F. Halma の仏蘭辞典(第四版、1733年刊)の RHUMATISME の項にも“Sorte de grande fluxion

qui afflige une *ou* plusieurs parties du corps."（蘭語省略）、すなわち「身体の一部分あるいは複数の部分にとりつく大きな fluxion（炎症）の一種」とある。

結局、現代で言うところの慢性関節リューマチであれば、その症状として関節に炎症ができるのであるから、「傷冷毒」なるものの症状に着目すればそれは fluxion であるし、病名に着目すれば rheumatism ということになる。「傷冷毒」の本質的な語義がはっきりしていないので、これ以上西洋語と「傷冷毒」の対応関係の是非を論じることはできないが、結論としては『注解』の対応も『対訳』の対応も誤りとは言えないということになる。ただ『対訳』の訳語は、仏語との対応を切り離して、英語と日本語との対応関係から『注解』の訳語を見直して改訂したものと考えられ、その翻訳態度は注目に値する。

4．明治四年刊の単語集

以上述べた幕末期の三本の異同を踏まえて、明治四年刊の単語集の系統関係について以下に考えていく。

4.1.　幕末の三本と明治四年刊の諸本との関係

上に見てきた幕末の三本の異同を手がかりにして、明治四年刊の五本の系統を探ることができる。まずそれら異同のある語について、全ての本を対照させる（**表7**）。

紙幅の都合上、全ての語について記すことができないが、**表7**に見られる傾向は資料全体についても言える。すなわち、明治四年の五本全てが幕末の三本のうちの『注解』の訳語とよく一致し、同時にとりたてて『便覧』や『対訳』から影響を受けていると思われる箇所がない。ただし『通俗仏蘭西単語篇』（以下『通俗仏単』）に限っては、『注解』の他に『便覧』も参照した形跡があり、資料全体を見渡した場合には『注解』よりも『便覧』に一致する語の方がやや多い。

また、**表7**からは『英単語篇増訳』（以下『増訳』）の12番が『対訳』を参照しているようにも見えるが、後述するように『増訳』では独自に訳語を変更している箇所が多く、他の箇所も併せて考えると、この箇所は『対訳』を参照したので

表7：幕末の三本と明治四年刊の五本との関係

番号	2	12	16	18	200	203	227
『英仏単語篇注解』	腰掛(コシカケ)	書翰(テガミ)	書付(カキツケ)	手本(テホン)	作事兵(サクジ) (作支方ナリ)	番兵(バンヘイ)	砦壁(サイヘキ)
『対訳名物図編』	1オ 牀几(コシカケ)	1ウ 文字(モンジ) 又手簡(テガミ)	1ウ 著述(チョジュツ) 又書物(カキモノ)	1ウ 寫書(ウツシ)	11オ 築城者(チクジヤウシヤ)	11オ 番兵(バンリバン)	12ウ 壘壁(ソトガマヘ)
『英仏単語便覧』	1オ 榾(コシカケ)	1オ 手簡(テガミ)	1ウ 文牒(カキモノ)	1ウ 法帖(テホン)	8オ 土工兵(ドコウヘイ)	8オ 張番(バンリバン)	9オ 砦ノ外構(トリデノソトガマヒ)
『通俗仏蘭西単語篇』	1オ 腰掛(コシカケ)	1ウ 手簡(テガミ)	1ウ 文牒(カキモノ)	2オ 手本(テホン)	12オ 土工兵(ドコーヘイ)	12オ 番兵(バンペイ)	13ウ 砦壁(サイヘキ)
『通俗英吉利単語篇』	1オ 腰掛(コシカケ)	1ウ 書翰(テガミ)	1ウ 書附(カキツケ)	2オ 手本(テホン)	12オ 作事兵(サクジ) 作事方ナリ	12オ 番兵(バンヘイ)	13ウ 砦壁(サイヘキ)
『英単語篇増訳』	椅子(コシカケ)	文字(モンジ)	書付(カキツケ)	手本(テホン)	作事兵 サクジ方ナリ	番兵	砦壁(トリデノカベ)
『独逸単語篇和解』	1オ 腰掛(コシカケ)	1ウ 書翰(テガミ)	1ウ 書付(カキツケ)	1ウ 手本(テホン)	11オ 作事兵(サクジヘイ)	11オ 番兵(バンヘイ)	12オ 砦(シヘキ(ママ)) 壁
『独逸訳附単語篇』	p.1 腰掛(コシカケ)	p.2 書翰(テガミ)	p.2 書付(カキツケ)	p.2 手本(テホン)	p.15 作事兵(サクジヘイ) 作支方ナリ	p.15 番兵(バンヘイ)	p.17 砦壁(サイヘキ)

はなく、『増訳』の訳語の変更が偶然『対訳』と同じであったものと考えるべきであろう。

明治四年刊の資料のほとんどが『注解』の訳語と一致するとして、残された問題は、それぞれが直接に『注解』に拠っているのか、あるいは明治四年刊の資料の間で参照関係があったのかという点になる。この点について、各資料の特徴を記しつつ以下に見ていく。

4.2.　『通俗仏蘭西単語篇』

前述の通り、『通俗仏単』は幕末期の三本のうち『注解』と『便覧』の両方の影響を受けている。しかしそれだけでなく、独自に改訳を行ったり、注釈を加えている箇所も稀に見られる。

表8うち、661番は原語が“The shovel. / La pelle.”なので、多くの本で記されている「火」は誤りである。『通俗仏単』はこれを独自に「火掻(ヒカキ)」と直している。(**表8**からは『対訳』を参照したようにも見えるが、他の箇所から考えて、『対訳』の影響とは考えにくい。)

550番は前に『対訳』の項で触れた箇所であるが、ここで『法単』は「傷冷毒」という語を「瘴癘毒(シヤウレイドク)」という表記に変更している。

表 8 :『通俗仏蘭西単語篇』独自の記述が見られる箇所

番号	550	639	661	1150
『英仏単語篇注解』	シヤウレイドク 傷冷毒	ニカイ 樓（仏　物置キ）	ヒ 火	キンカザリシ 黄金匠（仏　金銀匠）
『対訳名物図編』	28ウ 痢病	モノオキ 33オ 物置所 但テンゼウノウエナリ	34オ 火鏟	59オ 金　匠
『英仏単語便覧』	20ウ 傷冷毒	23ウ 樓（仏　物置キ）	24ウ 火	42ウ 黄金匠（仏　金銀匠）
『通俗仏蘭西単語篇』	31ウ 瘴癘毒	モノヲキ 36ウ 物置　穀物杯ノ	ヒカキ 37ウ 火掻	キンギンシ 23ウ 金銀匠　惣テ金銀ノ道具ヲ拵ルモノ
『通俗英吉利単語篇』	シヤフレイドク 31ウ 傷冷毒	ニカイ 36ウ 樓	37ウ 火	キンカザリシ 65ウ 黄金匠
『英単語篇増訳』	シヤウレイドク 傷冷毒	ニカイ 樓　佛モノオキ	（訳語ナシ）	キンカザリシ 黄金匠
『独逸単語篇和解』	シヤウレイドク 28ウ 傷令毒（ママ）	ニカイ 33オ 樓（仏　物置）	ヒ 34オ 火	キンカザリシ 58ウ 黄金匠
『独逸訳附単語篇』	シヤウレイトク p.41 傷冷毒	ニカイ p.47 樓	ヒ p.49 火	キンカサリシ p.84 黄金匠

「傷冷毒」はこの時代の比較的新しい語と思われ、由来もはっきりしていないのに対し、「瘴癘」は古くから存在している語である。『大漢和辞典』には「瘴気のためにおこる熱病。マラリヤ等の類。南方の濕地に多い。」とあり、『南史』（649～683年成立）や『北史』（659年成立）の用例が挙げられている。ヘボンの『和英語林集成』にも「シヤウレイドク，瘴癘毒，*n.* Malaria, pestilential vapors.」（初版から3版まで同じ）と記されており、『大漢和辞典』の記述を裏付ける。

恐らく『法単』は、『注解』などに記されている「傷冷毒」の漢字表記に疑問を感じ、古くから存在している「瘴癘毒」という表記に独自に改めたものと考えられる。ただし、前述したように“La fluxion.”という仏語の持つ意味（「炎症・充血」）から考えると、却って「瘴癘毒」の表記は不適切ということになろう。しかし、逆に「傷冷毒」という表記がまだ一般的ではなかったことを示すものとして、興味深い。

因みに、大槻文彦の日本語辞書『言海』（明治二十二～二十四年刊）では「傷冷毒」が「風濕、リウマチス、ノ類。」、「瘴癘毒」が「沼地ナドノ蒸撥氣ノ、人體ノ害毒トナルモノ。」と、意味の違う語として別に立項されている。これに対し、山田微妙の『日本大辞書』（明治二十五～二十六年刊）では「{（傷冷毒＝瘴癘毒）} 風濕、りうまちすノ類。沼ナドノ濕氣ノ毒。」と同じ語として立項され、

混同している。

4.3.　『通俗英吉利単語篇』

『通俗英吉利単語篇』（以下『通俗英単』）も『注解』の訳語を受け継いでおり、『便覧』や『対訳』の影響を受けていると思われる箇所は見当たらない。また、取り立てて訳語に手を加えるということもなく、『注解』に記されていた注釈のうち不必要なものを取り除くといった変更にとどまっている。

現存する伝本は、様々な書誌的異同を残しており、かなり頻繁に増刷されたものと思われるが、内容的には『注解』の記述を超えるものではなく、誤記もいくつか見られる（拙稿2000参照）。

4.4.　『英単語篇増訳』

『増訳』もやはり『注解』を参照していたと考えられる（**表9**）。

『増訳』の293番には「佛ニハ老年　原本誤ナラン」という注釈が記されているが、この注釈は他に『注解』にしかなく、『注解』を直接参照していたことの証拠となる。また、509番の注釈からも『注解』に直接拠ったことが窺える。

表9：『英単語篇増訳』が『英仏単語篇注解』を参照している証拠

番号	200	293	509	1183
『英仏単語篇注解』	作事兵（サクジ） （作支方ナリ）	年齢（トシ）（仏　老年） 仏原本 Veillesse 誤レリ Vieillesse ニ改ムヘシ	驚（オドロキ） （仏　畏怖（コワガル））	錫匠（スズシ） （仏　銕葉匠（ブリッキシ））
『対訳名物図編』	11オ 築城者（チクジヤウシヤ）	15ウ 老年又年齢（ロウネンマタトシバヘ）	26ウ 愕（オドロキ）	60ウ 錫匠（スズモノシ）
『英仏単語便覧』	8オ 土工兵（ドコウヘイ）	11ウ 年齢（ヨワイ） （仏　老年）	19オ 驚（オドロキ） （仏　コワガル（））	43ウ 錫匠（スズシ） （仏　鉄葉匠（ブリッキシ））
『通俗仏蘭西単語篇』	12オ 土工兵（ドコーヘイ）	17オ 老年（トシヨリ）	29オ 恐怖（ヲソレ）	25ウ 鉄葉匠（ブリッキシ）
『通俗英吉利単語篇』	12オ 作事兵（サクジ） 作事方ナリ	17オ 年齢（トシ）	29オ 驚（ヲドロキ）	67ウ 錫匠（スズシ）
『英単語篇増訳』	作事兵 サクジ方ナリ	年齢（トシ）　佛ニハ老年 原本誤ナラン	驚（ヲドロキ）　佛　畏怖（コワガル）	銕葉匠錫匠（ブリッキシスズシ）
『独逸単語篇和解』	11オ 作事兵（サクジヘイ）	15ウ 年齢（トシ）	26ウ 驚（オドロク）	60オ 錫匠（スズシ）
『独逸訳附単語篇』	p.15 作事兵（サクシヘイ） 作支方ナリ	p.22 年齢（トシ）	p.38 驚（オドロキ）	p.86 錫匠（スズシ）

表10：『英単語篇増訳』独自の改訳の例

番号	2	10	11	15	209	1240	1242
『英仏単語篇注解』	コシカケ 腰掛	チヤウギ 定規	セキヒツ 石筆	シラチヤウ 草本	カタナ 刀	レキシカ 歴史家	リツガクシヤ 律學者
『対訳名物図編』	1オ コシカケ 牀几	1ウ デウキ 界尺	1ウ セキヒツ 石筆	1ウ サフシ 册子	11ウ ケン 劍	63ウ レキシカ 歴史家	63ウ リツガクシヤ 律學者
『英仏単語便覧』	1オ コシカケ 橇	1オ チヤウギ 定規	1ウ セキヒツ 石筆	1ウ シラチヤウ 草本	8ウ カタナ 刀	45ウ レキシカ 歴史家	45ウ リツガクシヤ 律學者
『通俗仏蘭西単語篇』	1オ コシカケ 腰掛	1ウ ジヤウギ 定規	1ウ セキヒツ 石筆	1ウ シラチヤウ 草本	12ウ カタナ 刀	28ウ (ママ)レキシカ 暦史家	28ウ リツガクシヤ 律學者
『通俗英吉利単語篇』	1オ コシカケ 腰掛	1ウ チヤウギ 定規	1ウ セキヒツ 石筆	1ウ シラチヤウ 草本	12ウ カタナ 刀	70ウ レキシカ 歴史家	70ウ リツガクシヤ 律學者
『英単語篇増訳』	コシカケ 椅子	キヨクシヤタ 曲尺	フデカザリ 筆飾	テナラヒサウシ 手習草紙	ワキザシ 脇差	キロクシヤ 記録者	セイジガクシヤ 政治学者
『独逸単語篇和解』	1オ コシカケ 腰掛	1ウ シヤウキ 定規	1ウ セキヒツ 石筆	1ウ シラチヤウ 草本	11ウ カタナ 刀	63オ レキシカ 歴史家	63オ リツガクシヤ 律學者
『独逸訳附単語篇』	p.1 コシカケ 腰掛	p.1 チヤウギ 定規	p.1 セキヒツ 石筆	p.2 シラチヤウ 草本	p.16 カタナ 刀	p.90 レキシカ 歴史家	p.90 リツガクシヤ 律學者

また、『通俗英単』の訳語のほとんど全てがほぼ『注解』と同じであるのに対し、この『増訳』ではいくつかの訳語に独自の変更が施されている（**表10**）。これらの訳語は他の単語集に見られず、独自に変更したものであると考えられる。ただし、11番や1242番の訳語のように、改悪とも言えるような変更が少なくない（11番の原語は “The leadpencil. / Le crayon.”、1242番は “A lawyer. / Un jurisconsulte.”）。

表11：『英単語篇増訳』における外来語訳語の処理（その１）

番号	164	165	166	167	168
『英仏単語篇注解』	アドミラール 仏アミラル	ワイシ,アドミラー 仏ビス,アミラール	カピテイン 仏カピテイヌ	リウテナント 仏リウトナン	ミッドシップメン 仏アスピラン
『対訳名物図編』	9オ スイグンソウトク 水軍總督	9ウ フソウトク(ママ) 副總督	9ウ センシヤウ 舩將	9ウ ジシヤウ 次將	9ウ デンレイシヤ 傳令者 即士官見習
『英仏単語便覧』	6ウ 英アドミラール 仏アミラル	6ウ 英ワイシ,アドミラー 仏ビス,アミラール	7オ カピテイン 仏カピテイヌ	7オ リウテナント 仏リウトナン	7オ ミドシップメン 仏アスピラン
『通俗仏蘭西単語篇』	10オ ヤクミヤウ 役名	10オ 同上	10オ 同上	10オ 同上	10オ 同上
『通俗英吉利単語篇』	10オ 役名 アドミラール	10オ 〃 ワイシ アドミラール	10オ 〃 カピテイン	10オ 〃 レフテナント	10オ 〃 ミッドシップメン
『英単語篇増訳』	舩大將	下般大將	首領又舟將カシラ又タイショ	公国ノ奉行	圖將
『独逸単語篇和解』	9オ ヤクミヤウ 役名	9オ 上同	9オ 上同	9オ 上同	9ウ ヤクミヤウ 役名
『独逸訳附単語篇』	p.13 アドミラール 軍吏ノ名	p.13 フィゼ,アドミラール 上同	p.13 カピテーン 上同	p.13 ロイテナントゥ 上同	p.13 ゼー,カデットゥ 上同

表12：『英単語篇増訳』における外来語訳語の処理（その２）

番号	224	774	784	854	918
『英仏単語篇注解』	テント（兵卒ノ休息スル幕張）	モセル酒	リキウル酒	ヒエシント（花草ノ名和名ナシ）	カナリヤ
『対訳名物図編』	12オ 天幕（テンマク）	40オ 獨乙白酒（ドイツノシロブダウシユ）	40ウ 氷糖酒（コホリサタウシユ）	44オ 風信子 草花ノ名和名ナシ	47オ 福嶋鳥（カナリヤ）
『英仏単語便覧』	9オ テント（兵卒ナドノ休息スル幕張）	29オ モセル酒	29ウ リキウル酒	32オ ヒエシント（花草ノ名和名ナシ）	34オ カナリヤ
『通俗仏蘭西単語篇』	13ウ テント 兵卒ノ休息スル幕張	2ウ モゼル酒	3オ リキウル酒	7オ ヒエシント 花草ノ名和名ナシ	10ウ カナリヤ
『通俗英吉利単語篇』	13ウ（兵卒ノ休息スル幕張）	44ウ モセール酒	45オ リキウル酒	49オ ヒエシント（和名ナシ花草ノ名）	52ウ カナリヤ
『英単語篇増訳』	兵卒休息スル幕張	モセル酒（シユ）	リキウル酒	ヒユシント	カナリヤ
『独逸単語篇和解』	12オ テント（兵卒（ヘイツ）ノ休息（キフソク）スル幕（マク））	39ウ モセル酒	45オ リコラエル酒（シユ）	43ウ ヒエシンテ	47オ カナリヤ
『独逸訳附単語篇』	p.17 テント 兵卒ノ休息スル幕張	p.57 モセル酒	p.57 リキュウル酒	p.62 ヒアシント 花草ノ名和ナシ	p.67 カナリヤ

また、『対訳』と同様、『注解』で外来語になっていた訳語も極力翻訳しようとする姿勢が見られる（**表11**）。

ただし、『対訳』の訳語とは一致せず、参照関係は認められない。また、『増訳』におけるこのような翻訳姿勢は、全語について徹底したものではない。その点、ほぼ全語について翻訳しようとする『対訳』の姿勢とは異なる（**表12**）。

4.5. 『独逸単語篇和解』と『独逸訳附単語篇』

『独逸単語篇和解』（以下『和解』）と『独逸訳附単語篇』（以下『訳附』）は、ともに独語と日本語を併載する単語集であるが、一方がもう一方を参照したものではなく、双方ともが『注解』を参照して、別々に編纂されたものであると考えられる。以下にそれを実証する。

まず『和解』であるが、独語の単語集であるにもかかわらず仏語に対する注釈を残している部分がある。**表13**にその箇所を挙げたが、これらは『訳附』に存在しないので、『和解』が『訳附』を参照した可能性は低い。また、**表13**の注釈からは『和解』が『注解』または『便覧』を参照したことが窺われるが、前述のように、他の箇所において特に『和解』が『便覧』を参照したと思われる箇所がな

いので、『和解』は『注解』を参照していたということになる。

逆に『訳附』が『和解』を参照した可能性はどうかというと、**表14**の部分からその可能性も低いことがわかる。そして544番と917番の注釈から、『訳附』もまた『注解』を参照していたことがわかる。

表13：『独逸単語篇和解』が『英仏単語篇注解』を参照している証拠

番号	613	667	970	1328
『英仏単語篇注解』	伏樋（フセヒ）（仏　下水（ゲスイ））	ブランケット（ヨキ）（仏　夜着）	錫（スズ）（仏　鐵葉（ブリッキ））	狩（カリ）（仏　兎狩（ウサギカリ））
『対訳名物図編』	32オ 伏樋（フセヒ）	34ウ 覆氈（フランケット）	50オ 錫（スズ）	67ウ 狩（カリ）
『英仏単語便覧』	23オ 伏樋（フセヒ）（仏　下水（ゲスイ））	24ウ ブランケット（ヨキ）（仏　夜着）	36オ 錫（スズ）（仏　鉄葉（ブリッキ））	48ウ 狩（カリ）（仏、兎狩（ウサギカリ））
『通俗仏蘭西単語篇』	35オ 下水（ゲスイ）	38オ 夜著（ヨキ）（ママ）	13ウ 鉄葉（ブリッキ）	33ウ 兎狩（ウサギガリ）
『通俗英吉利単語篇』	35オ 伏樋（フセヒ）	38オ ブランケット	55ウ 錫（スズ）	75ウ 狩（カリ）
『英単語篇増訳』	伏樋（フセヒ）	ブランケット　佛ノ夜着	錫（スズ）	狩（カリ）
『独逸単語篇和解』	31ウ 伏樋（フセヒ）（仏　下水）	34ウ ブランケット（ヨキ）（佛　夜着）	49ウ 錫（スズ）（佛　ブリッキ）	67ウ 狩（カリ）（仏　ウサギカリ
『独逸訳附単語篇』	p.45 伏樋（フセヒ）	p.49 夜著（ヨキ）（ママ）	p.71 鐵葉（ブリッキ）	p.96 狩（カリ）

表14：『独逸訳附単語篇』が『英仏単語篇注解』を参照している証拠

番号	330	331	544	917
『英仏単語篇注解』	新郎（ハナムコ）佛許嫁郎（ユヒナウスミタルヲトコ）	新娘（ハナヨメ）佛許嫁女（ユヒナウスミタルヲンナ）	神経熱（シンケイ子ツ）（陰症ノ傷寒）	金絲黄雀（キンシワウジヤク）（ママ）（和名ナシ）
『対訳名物図編』	17ウ 新夫（ハナムコ）	17ウ 新婦（ハナヨメ）	28ウ 神経熱（インシヤウノンヤウカン）	47オ 金絲黄雀
『英仏単語便覧』	12ウ 新郎（ハナムコ）仏許嫁郎（ユヒナウスミタルヲトコ）	12ウ 新娘（ハナヨメ）仏許嫁女（ユヒナウスミタルヲンナ）（ママ）	20ウ 神経熱（シンケイ子ツ）（漢医ノ陰症傷寒ト云者）	34オ 金絲黄雀（キンシワウジヤク）
『通俗仏蘭西単語篇』	19オ 許嫁郎（ユヒナウスミタルオトコ）	19ウ 許嫁女（ユヒナウスミタルオンナ）	31オ 神経熱（シンケイ子ツ）	10ウ 金絲黄雀（キンシワウジヤク）
『通俗英吉利単語篇』	19オ 新郎（ハナヨ（ママ））	19ウ 新娘（ハナヨメ）	31オ 神径熱（シンケイ子ツ）（ママ）	52ウ 金絲黄雀（キンシクワウジヤク）
『英単語篇増訳』	新郎（ハナムコ）佛ニハ許嫁郎ユイノスミタル男	新娘（ハナヨメ）佛ニハ許嫁結納ノスミタル女	神経熱（シンケイ子ツ）	金絲黄雀（キンシクワウジヤク）
『独逸単語篇和解』	17ウ 新郎（ハナムコ）	17ウ 新娘（ハナヨメ）	28オ 神經熱（シンケイ子ツ）	47オ 金絲黄雀（キンシクハウジヤク）
『独逸訳附単語篇』	p.25 許嫁郎（ユヒナウスミタルヲトコ）	p.25 許嫁女（ユヒナウスミタルヲンナ）	p.40 神経熱（シンケイ子ツ）陰症ノ傷寒	p.67 金絲黄雀（キンシワウジヤク）和名ナシ

双方の独語部分についても指摘しておく。[注11] 双方とも、独語は *Traveller's Manual* に拠ったのではなく、春風社『独逸単語編』（明治四年刊、[注12] 独語のみ1490語、以下『独単』と略記する）に拠っているようである。

表15からわかるように、『独単』の独語表記と *Traveller's Manual* の独語表記とでは異なる箇所がかなりあり、『独単』の独語は *Traveller's Manual* に拠らず、『英単』または『法単』から独自に導き出したものであることがわかる。そして、『和解』も『訳附』も基本的に『独単』の独語表記に拠っていることがわかる。ただし、高橋1993にも指摘されているように、『和解』が『独単』の誤りをそのまま受け継ぐ傾向があるのに対し、『訳附』はその誤りを正そうとする姿勢が見られる。例えば**表15**の106番や199番で、『和解』は『独単』のミススペルをそのまま受け継いでいるが、『訳附』はそれを改めようとした姿勢が見られる。（特に『訳附』の199番は、"Kanonnier" の "ano" の部分だけが入木されており、開板当初は "Konannier" となっていたことが想像される。）また、『訳附』の147語

表15：*Traveller's Manual* と『独単』『和解』『訳附』における独語表記の相違例

番号	*Traveller's Manual*	『独逸単語編』	『独逸単語篇和解』	『独逸訳附単語篇』
106	p.12 Ein Brunnen.	〃(ein) Spriugbrunnen,(ママ)	6オ 泉(イヅミ) 〃(Ein)Spriugbrunnen(ママ)	p.8 泉(イヅミ) 〃(ein)Spriugbrunnen(ママ)
115	p.12 Der Canal.	der Kanal,	6ウ 海峡(カイケフ) Der Kanal	p.9 海峡(カイケフ) der Kanal
130	p.14 Eine Wasserhose.	eine Wasserbraut,	7ウ 龍巻(タツマキ) Eine Wasserbraut	p.10 龍巻(タツマキ) eine Wasserbraut
147	p.16 Die Luke.	〃(die)Brut,	8オ 艙口(ニゴリノイリクチ) 〃(Die)Brut,	p.11 艙口(ニゴキリノイリクチ) 〃(die)Luke
185	p.18 Der Fähnrich.	das Signal,	10オ 上同〈役名〉(ヤクミヤウ) Das Signal	p.14 暗号(アイッ) das Signal
189	p.20 Der Trommelschläger.	der Tambour,	10ウ 大鼓役(タイコヤク) 〃(Der)Tambour	p.14 太鼓役(タイコヤク) der Tambour
199	p.20 Ein Kanonier.	ein Konannier,(ママ)(ママ)	11オ 砲手(ウチテ) Ein Konannier(ママ)(ママ)	p.15 砲手(ウチテ) Ein Kanonnier(ママ)
200	p.20 Das Ingenieur-Corps.	das Ingenieur-Corp,	11オ 作事兵(サクジヘイ) Das Ingenieur C(ママ)	p.15 作事兵(サクシヘイ) 作支方ナリ das Ingenieur-Corp

目の独語は *Traveller's Manual* と一致しているが、全体の数からすればこのような箇所は少なく、*Traveller's Manual* を参照したと見るよりは、『訳附』が独自に変更したと見るべきであろう。

185番は、その前後に軍隊の役職名の語が列記されている箇所であり、独語も当然、役職名でなければならない箇所である。（この語について『対訳』では「護旗官（ハタモチ）」（10ウ）、『増訳』でも「旗持」と訳されている。）よって、本来は *Traveller's Manual* にあるように "Der Fähnrich." という独語が入るべきなのに、『独単』では "das Signal," という語が入っており、意味のつながりとしては不適切な語を当てはめてしまっている。勿論この原因は、『英単』及び『法単』の "The ensign. / L'enseigne." から不適切な独語を導き出したことによるが、『和解』ではそのまま「上同」（櫻井注：「役名（ヤクミヤウ）」）とし、独語と訳語がかみあっていないのに対し、『訳附』は訳語を「暗号（アイツ）」と変えることでこの問題を解決している。『訳附』の日本語は、ほとんど『注解』の訳語をそのまま踏襲したものであるが、稀にこのような箇所も見られる。

以上見てきた『和解』の誤記や『訳附』独自の改訳の状況からは、『和解』が『訳附』を参照したとも、『訳附』が『和解』を参照したとも考えられない。日本語に関しても同様であったので、『和解』と『訳附』は、ともに『注解』と『独単』を参照にしつつも、直接の参照関係はなかったということになる。

なお、高橋輝和1993にも指摘があるが、『訳附』は340語目「der Freund 朋友（トモ）」の後に「die Freundin 女朋友（ヲンナノトモ）」が立項されており（p. 25）、このため一語増えて1491語になっている。

5．まとめ

本稿で述べたことをまとめると、以下のようになる。

① 日本語表記を持つ幕末の『英吉利単語篇』系統の単語集、即ち『英仏単語篇注解』『対訳名物図編』『英仏単語便覧』について、訳語の異なる箇所を示した。

② 上記の訳語の異同を手がかりに、明治四年刊の五本、すなわち『通俗仏

蘭西単語篇』『通俗英吉利単語篇』『英単語篇増訳』『独逸単語篇和解』『独逸訳附単語篇』の相違点を掲げ、その系統関係を明らかにした。その結果、その五本の内部での参照関係は観察されず、五本それぞれが独自に『英仏単語篇注解』を参照していることを指摘した。ただし、『通俗仏蘭西単語篇』のみは『英仏単語篇注解』の他にも『英仏単語便覧』も参照しており、両者から訳語を選択している。

③　各資料の特徴的な部分から、それぞれの資料がいかなる方法と翻訳態度をもって編纂されたのかを指摘した。

今回の調査では、1490語の日本語を持つ明治四年までの単語集に限ったが、この他にも改編本や明治五年以降の単語集が数多く存在する。よって、今後も調査が続けられるべきであるが、今回の指摘はその手がかりとして重要な意味を持つと思われる。のみならずこの調査の結果は、拙稿2000に述べるように、後に影響を与えた他の系統の単語集の編纂方法を考える上でも重要な意味を持つ。

参考文献

渡辺　実 1962　『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』大阪女子大学附属図書館

鈴木重貞 1975　『ドイツ語の伝来』教育出版センター

後藤純郎 1976　「市川清流の生涯－「尾蠅欧行漫録」と書籍館の創立－」『研究紀要（日本大学人文科学研究所）』18

同　　1981　「市川清流の著作について」『図書館学会年報』27-2, 3

高橋輝和 1993　「『独逸訳附単語篇』とその前版『独逸単語編』について」『洋学資料による日本文化史の研究』Ⅵ、吉備洋学資料研究会

櫻井豪人 1998　「『英吉利単語篇』『法朗西単語篇』の底本と『英仏単語篇注解』の訳語」『国語学』192

同　　2000　「二つの『改正増補英語箋』－双方の関係と編纂方法の相違－」（『国語語彙史の研究』19、和泉書院）

注

注1　対照に当り、『英吉利単語篇』は早稲田大学図書館洋学文庫C599、『法朗西単語篇』は東京外国語大学附属図書館蔵本、『通俗仏蘭西単語篇』は豊橋市中央図書館蔵本、『独逸単語篇和解』は国立国会図書館蔵本、その他は雄松堂フィルム出版『マイクロフィルム版初期日本英学資料集成』所収本に拠った。ただし、不鮮明な箇所は他本も参照した。

注2　『注解』の著者について。本自体には書かれていないが、明治四年四月の大史局編『新刻書目一覧』(日本図書センター『日本書籍分類総目録』第1巻、1987年による)に「英佛單語篇註解(ママ)　〔柳河春三／渡辺(ママ)一郎〕合譯　一冊」と書かれている。

注3　『対訳』の著者について。本自体には附言に「買山迂夫記」とあるだけで、著者が不明であったが、後藤純郎1981により、買山が市川清流(央坡)の号であることが明らかにされた。明治五〜七年に刊行された『対訳』の絵入改題本『英国単語図解』にも奥付に「市川央坡著」と記されているので、本稿でも『対訳』の著者を市川清流として扱う。市川清流の略歴については後藤1976を参照。

注4　『通俗仏単』の書名について。原題簽には全ての伝本で「〔通／俗〕佛蘭西単語篇上(下)」と記されているが、見返しに「〔通／俗〕法朗西単語篇」とある本と「〔通／俗〕佛蘭西単語篇」とある本の二種があり、書名にゆれがある。明治四年四月の大史局編『新刻書目一覧』によれば、「近刻」として「通俗仏蘭西単語篇　戸沢東太郎　二冊」と記されているので、本稿ではこれに従い、『通俗仏蘭西単語篇』としておく。

注5　『増訳』の刊年及び書名について。まず刊年であるが、タイトルページに「ANNO 4 MEI-ZI.／明治四年(メイジヨ子ン)」と書かれている一方で、見返しの上部に「明治六年春校正　西暦千八百七十三年」と書かれ、また伝本によってはその見返しが付されていなかったり、その他、見返しがあってもその「明治六年…千八百七十三年」の文字だけが記されていない本があったりと、問題が多い。この点について、文部省『准刻書目』(明治文献資料刊行会『明治前期書目集成』第六分冊、1972年による)では明治四年十二月分に「英單語篇増訳〔前同人(譯者　松岡文橘)／前同人(出版人　小川金助)〕一帖」と記されており、実際の刊行はもう少し遅かったかもしれないが、明治四年中には草稿が完成していたものと思われる。本稿では一応、この書の刊年を明治四年とし、明治四年の十二月か明治五年の早い時期に刊行されたものと考えておく。また、書名についてであるが、原題簽には「英單語篇増訳」とある一方で、見返しには「英吉利／單語篇増訳」とあり、これもゆれている。文部省『准刻書目』の記述をとって、本稿では『英単語篇増訳』とする。

注6　『独逸訳附単語篇』の刊行時期及び著者について。本自体には「Im 4ten Jahre Meidsi」あるいは「千八百七十一年」「明治四辛未年」としか書かれていないが、文部省『准刻書目』によれば『独逸訳附単語篇』も明治四年十二月分に入っており、こ

れも明治四年の遅い時期か明治五年に入っての刊行であったと思われる。ただし、書名が「獨逸單語篇譯附」となっており、「訳者　山越接三／出版人　辻本九兵衛」となっている。『訳附』巻末の刊記にも辻本九兵衛の名があるので、この記事は『訳附』のものであろう。

注7　『注解』のこのような原本訂正の注釈は、『法単』の訂正も含めて全部で六箇所あるが、『対訳』以外の他の単語集においてその訂正が実行された形跡は一切ない。

注8　la fluxion ではなく le flux であれば「排泄」の意味があり、例えば le flux de ventre で「下痢」の意味となる。なお、仏語の意味の参照には白水社『仏和大辞典』(1981年）を主に使用した。また、英語の意味は *The Oxford English Dictionary* (second edition, Clarendon Press•Oxford, 1989)、独語の意味は小学館『独和大辞典』(第2版、1998年)、伊語の意味は *Cambridge Dizionario Italiano- Inglese Inglese-Italiano* (Cambridge University Press, 1985) 等を参照した。

注9　*Traveller's Manual* は William and Mary 大学蔵の第18版（1866年刊）を使用した。

注10　名古屋大学文学部国語国文学研究室蔵本による。以下、引用に用いた資料は、『和訳独逸辞典』が三修社複製本、F. Halma の仏蘭辞典がゆまに書房『近世蘭語学資料』影印本、『和英語林集成』は初版が北辰影印本、再版が東洋文庫影印本、三版が講談社学術文庫影印本、『言海』及び『日本大辞書』は大空社『明治期国語辞書大系』影印本に拠った。

注11　独語表記に関しては高橋1993に詳しく分析されている。

注12　『独逸単語編』の刊行時期及び著者について。本自体には「Viertes jahr von Meid-ji.」あるいは「明治辛未」(即ち明治四年）としか書かれていないが、明治四年四月の大史局編『新刻書目一覧』に「以下近刻」として「獨乙單語編　司馬少博士著　一冊」と書かれている。司馬少博士とは司馬凌海のことで、春風社とは司馬凌海のドイツ語塾の名称であるから、この記事は『独単』のことを指しているのであろう。(司馬凌海及び春風社に関しては、鈴木重貞1975参照。）この記事から、『独単』は、『和解』や『増訳』の刊行される約半年前に刊行されたものと考えられる。

（さくらい　たけひと　国語学）